



高橋彩子 布で世界を旅する

Saeko Takahashi
A voyage in fabric
2022 / 2025



Contents

- 01 **アーティスト・イン・レジデンス 高橋彩子「布で世界を旅する」**

- 14 「旅のはじまり」
 モンデンエミコ（金沢市民芸術村アート工房ディレクター）

- 17 「パッチの繋ぐ物語」
 渥美俊太郎（アートアンツメンバー／専門研究：芸術学）

- 20 「アーティスト・イン・レジデンスを終えて」
 高橋彩子（アッチコッチパッチ主宰）

- 25 **芸術村ファッションショー**

- 31 参加者の感想

- 32 「旅の途中」
 モンデンエミコ（金沢市民芸術村アート工房ディレクター）

- 33 「ワークショップを終えて」
 高橋彩子（アッチコッチパッチ主宰）

本記録集は2022年アーティスト・イン・レジデンス 高橋彩子「布で世界を旅する」と
2025年「芸術村ファッションショー」を1冊におさめたものです。



2022

Artist in Residence

「布で世界を旅する」

2022年3月19日（土）－ 27日（日）
金沢市民芸術村 PIT5アート工房

高橋彩子さんの手によって、2カ国以上の布を組み合わせてつくられるパッチ
“アッチコッチパッチ”は、まるで彫刻作品のように美しく、身に着けることで世界
旅行へとつれていってくれます。今までに作ったバッジの数は8000個を超え、そ
れぞれが誰かのもとへと旅立っています。パッチの展示に加え、世界各国の布を
繋ぎ合わせて大きな「布マップ」をつくる滞在制作にも挑みました。

アーティスト・イン・レジデンス

高橋彩子

布で世界を

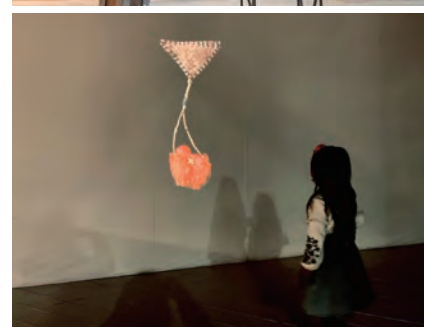
旅する







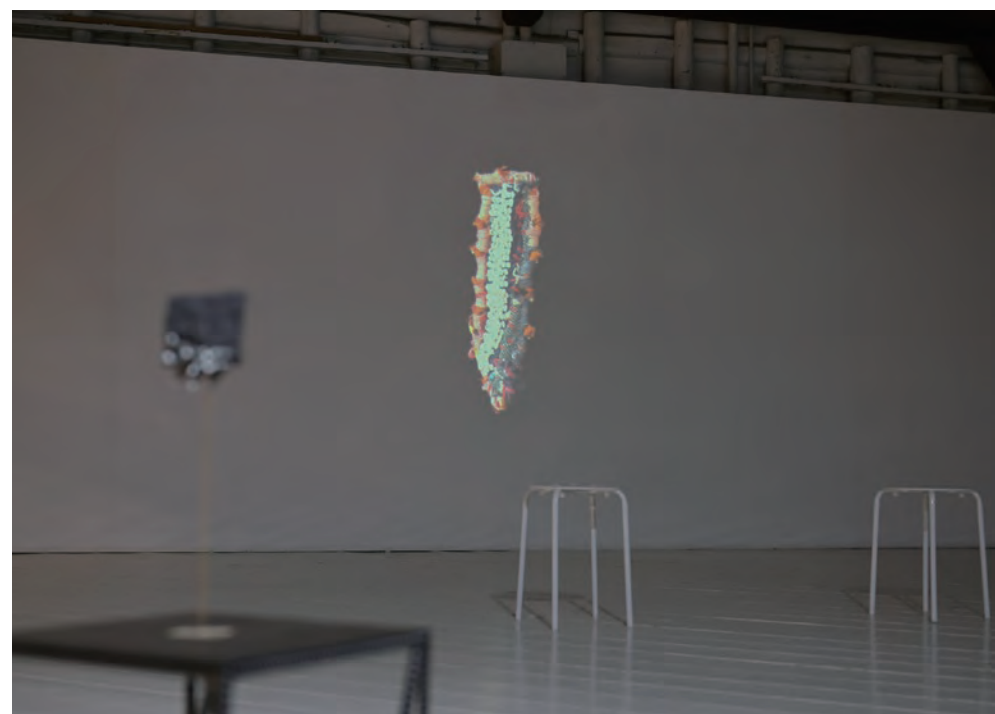
《バッチの脳内》2022



《アッチコッチパッチを体感する》2022



《アッチコッチパッチ》



《パッチの脳内》
2022 (部分)



滞在制作日記
アートアンツ（アート工房サポートスタッフ）が、
12日間の様子を、noteにレポートしました。



左上：旅の記録写真映像
左中・下：滞在制作の様子
右：会場の様子



アーティストトーク
「トークで旅する」アーカイブ
Youtube からご覧いただけます。
<https://youtu.be/LvQApGpdbm0>

来場者の感想

さまざまな国の布が気持ち良さそうに揺れていて、現実の世界も戦争のない平和な世界であればいいのと思った

会場全体から作家やパッチ、布を作った人の熱量を感じるような熱い展示でした。

見てふれて作れて、素晴らしいバランスで満喫しました。とても良い企画ですね。友人にもおすすめします。

作家が実際につくっているところを見ることができ、トークではパッチへの想いなど生の声をきくことができました。

異国に来れた気持ちになりました。





旅のはじまり

モンデンエミコ

(金沢市民芸術村アート工房ディレクター)

私が高橋彩子氏のバッチに出会ったのは、友人にすすめられて見たinstagramだった。画面に映るバッチを見た時「まるで美しい彫刻作品のようだ」と感じ、更新される投稿を楽しみに待つようになった。二つ以上の国や地域の素材で作られる“アッチコッチバッチ”“を見ることで、想像上の旅にでかけることができた。

コロナ禍によって、海外はおろか国内の移動もままならなくなる事態が続くからこそ、金沢市民芸術村アート工房を会場に、“アッチコッチバッチ”の旅を企画したいと考えるようになった。

高橋氏がはじめて金沢市民芸術村の下見に来た時、会場のあまりの広さに驚くなか、ここで展示をしていただけないかと依頼をした。「私のバッチのサイズを知っていますか？この会場を埋めるのに、いったい何千個バッチを作ればいいのでしょうか。」という言葉が返ってきて、その場での快諾は得られなかった。

その後、幾度か連絡を取り、2021年12月に企画のひとつであるワークショップの試作品をもって、横浜のアトリエに伺った。高橋氏はその段ボールでできた試作品のバッチを面白がり、そこから本格的に企画の方向性を共有することができ、本展覧会が動き出した。搬入日、高橋氏の最終的な展示プランがざっくりと書き込まれた用紙をみて、今日からの12日間で、想像を越える旅がはじまりそうだと胸が熱くなった。

会場内をアッチ（作品コーナー／見る！体感する！）と、コッチ（手仕事コーナー／つくる！）の二つの空間で構成した。

アッチ（作品コーナー）

“アッチコッチバッチ”を軸に、高橋氏の旅の視点を体感するような展示となった。モニターから流れる旅の記録写真を通りすぎると、力強いタイポグラフィのタイトルが目にはいる。そこから最初に出会うのが、メキシコ、ウズベキスタン、インド、タイなど世界各国の布が吊るしてある《布の森》だ。布に施された刺繍や装飾が

ら、作った人の癖や温もりを感じとることができ、見知らぬ異国の誰かを想像した。布が軽やかにゆれる様子に国境はなく、まるで国々が手を取りあっているようだった。中段壁面には、バッチの作り方が書き込まれた《バッチの脳内》が展示された。手書き文字の熱量に圧倒されながら、まるで標本とも図鑑ともとれるこの展示を、熱心に見入る鑑賞者が多かった。階段には人気作品“アッチコッチバッチ”を一点一点丁寧に展示台に設置した。バッチの堂々とした佇まいはまるで生き物のようで、個性あるバッチ同士がおしゃべりを楽しみながら鑑賞者を出迎えているようであった。最上段の壁面には、プロジェクターで拡大したバッチを投影した。バッチと人間のサイズが反転することで、バッチに人間が装飾品として身につけられているような不思議な体感がうまれた。鑑賞者は、旅の最終地点から熱気に包まれた会場全体を眺め、そして帰路へと歩みをすすめる。

コッチ（手仕事コーナー）

高橋氏による滞在制作と、サポートスタッフのアートアンツによるワークショップを開催した。

滞在制作では、横幅約8mの白い壁面にバッチや布を縫い合わせて《布マップ》の制作をした。日々変化する作品を前に、鑑賞者と高橋氏との交流がうまれ





バッチの繋ぐ物語

渥美俊太郎

(アートアンツメンバー／芸術学専攻)

た。当初の予定より2日も滞在制作日延長を希望してくれた気持ちの変化が、私達サポートする側にとっても嬉しいサプライズとなった。

バッチをプリントした紙を段ボールにはり、布や装飾品をコラージュして作る《段ボールバッチ》は、参加者の制作意欲を掻き立てた。高橋氏のもとへ、完成したバッチと国名の書かれたカードを持っていくと、布の原産国を知ることができた。原産国を知ることが、段ボールバッチを世界旅行で手にいれた宝物に変身させた。

ひとつの会場にさまざまな企画を組み込んだことによって、例えるならば、旅行先の市場に訪れたような感覚で、来場者はそれぞれの好みや関わり方で本展覧会を堪能した。

高橋氏もそうであるように、作家の多くは自分ひとりで作品をつくっている。ただ、企画を作るときは想いを共にした人が関わることで、ひとりではできない何かが生まれることがある。まさに本企画はそうだったと実感する。チャーム的な人柄とバッチにかける情熱が、多くの人の心を動かし、人から人へと伝わり、641人という来場者それぞれの想いで賑わい、今までに感じたことがないほど充実した企画となった。

最後に高橋氏が残した言葉を、ここに書いて文末とする。

「いつもは、バッチが私をこの場所に連れてきてくれていると思っていたが、今回初めて、私がバッチをこの場所に連れて来ることができた。と思えた。」

この言葉は、私達にとって最高の褒め言葉である。と同時にバッチとの関係性に変化が生まれた高橋氏が、この先どんな旅を続けるのか、ますます目が離せなくなった。きっと、高橋氏とバッチは私達をみたことのない旅路へと連れて行ってくれることだろう。

アッチコッチバッチを見ると、まずその姿の多様さに驚かされる。ユーモラスだったり可愛らしかったり、はたまた生き物のようだったり何かの呪具のようだったり、ひとつとして同じものがない。バッチというよりも、それぞれが強烈な個性を放つキャラクターといったほうが適切かもしれない。展示会場でじっとしているのが窮屈そうですらある。誰かの胸元に陣取って、世界を旅する日を夢見ているのだろう。

アッチコッチバッチが「アッチコッチ」である所以は、まさにその「旅」にある。バッチの素材は、世界の様々な地域から集められた布である。必ず2か国以上の布を用いて制作される。そこでは遠く隔たった土地の布どうしが、不思議なほど調和して同居している。それら布は単なる素材ではなく、それぞれの来歴を携えてバッチを形作っている。

思うにアッチコッチバッチが人々の心をとらえるのは、布が持つ物語が多層的に折り重なっているからではないだろうか。ある集団において長い年月をかけて作られ、身に着けられてきた布を、作家が旅の途上で見つけ、まったく異なる場所の布と作家自身の手によって組み合わせたり、ひとつのバッチになる。小さなバッチには時間も場所も異なる複数の物語が重なり合っている。そしてそのバッチを身に着けることで、ほかならぬ私自身もバッチが紡ぐ物語に参加することになる。それは、資本主義がドライブする刹那的なモノの消費とは真逆の、モノとの幸福な出会いにほかならない。

私たちは普段、手にするモノの来歴について、どれほど注意を払っているだろうか。生鮮食品の産地くらいは気にするかもしれない。しかし、身の回りのモノについて、それを誰がどこでどのように作られているか意識することはまれである。あくまで自分が差し出す対価に対してモノの効用がいかほどかを考量し、使い、捨てるのが今を生きる消費者の正しい態度である。

近年によく聞くようになった「コスパ」という3文字が、それを象徴的に表している。「コスパ」は、費用対効果を表す「コストパフォーマンス」という言葉の単なる



略語ではなく、モノに対する現代人の態度表明といえる。肝心なのは、少ない対価でより多くの便益を引き出すことであり、モノが持つ物語はさして重要な意味を持たない。そこで語られるのは、あくまで表層的な欲望を喚起するために広告が付与する出来合いのストーリーである。

対照的にアッチコッチバッチャは、それ自身が持つ物語ゆえに私たちに惹きつける。物語とは、人がモノを手にするときに抱く、本質的な欲望である。その理由を、私たちは「象徴価値」をめぐる議論の中に見出すことができる。

経済学の教えるところでは、商品としてのモノには使用価値と交換価値の二つの価値が存在する。例えばガソリンの使用価値は内燃機関の燃料となるところにある。これはガソリンというモノ自体に内在している価値である。一方の交換価値は需要と供給のバランスで決まる相対的なものである。ほんの十数年前までガソリンは1ℓ100円前後だったが、世界情勢をめぐる需給状況の変化で現在は170円前後にまでなってしまった。

第二次世界大戦後の消費文化華やかになりしころ、フランスの哲学者ボードリヤールはそれら二つとは異なる価値を付け加えた。消費社会において人々は、社会的地位や他人との差異を表現する記号や象徴を消費することを欲望するようになる。このように、あるモノを差異化の記号としてとらえたときに見いだされるのが「象徴価値」である。それは、いわゆるブランド品において端的に示される。使用価値とは関係なく、それを持っていること自体がステータスになるのである。

しかしながら、社会的差別化というのは象徴価値の持つひとつの側面にすぎない。思想家の内田樹は象徴価値の原初的形態であるトロブリアンド群島の「クラ」という儀礼に着目し、象徴価値が物語を通じて人と人を結びつける過程に注目して見せる。

クラは、群島内に散らばる集団が、貝でできた装飾品を交易するという形で行われる。クラに参加できるのは集団の中で特権的な地位にある者のみで、自分が受け渡しをする相手は決まっている。装飾品を受け取ったら、しばらく所有したのち、次の相手へと渡さなければならない。これによって異なる集団同士を結ぶ円環状のネットワークが構築される。ここでは象徴価値を持つ装飾品が、異なる集団同士を結び付ける役割を果たしている。

それだけではない。クラのメンバーは、その装飾品の来歴（誰の手に渡ってき

たか）や、それを持つことが集団にとってどれほど重要で栄光なことであるかを語りたがるそうである。クラの装飾品には物語がつまっている。「この装飾品をもっている人間がある種の社会的威信を発揮しうるのは、その装飾品が『無尽蔵の物語』を発信するからなのである」（内田樹『期間限定の思考—おじさんの思考2』2011年、113頁）。

象徴価値を持つ財貨は、持っている人と持っていない人を差別化するためではなく、所有する人々をある神話体系の中でひとつに結びつけ、全員が主体的にその「神話」に新たなエピソードを書き加えつつ参与するという快楽を提供するために存在するのだ。（中略）

象徴価値の本質はなによりも「物語」を共有することによるネットワークの立ち上げにある。

だから、君があるブランド品を欲望するのは、単に「金がある」とか「センスがいい」とかいうことを誇示したいがためにそうするのではなく、それを核とした「物語」を介して、他者と結びつきたいという切実な欲望に駆動されてのことなのだ。

アッチコッチバッチャが出来上がるまでには、複数の人間の、生身の手が介在している。糸を紡ぐ手、布を織る手、バッチャに仕上げる手によって、豊かな物語が織り込まれていく。それは、その布を持つ民族の物語であり、世界を旅するの物語であり、それを手にする私の物語でもある。バッチャを手にすることは、会ったことのない誰かと物語を共有し、バッチャが媒介する関係性の網目の中に身を投じることにはかならない。

パンデミックによって、私たちの生活が限られた範囲に押し込められて久しい。その中であってアッチコッチバッチャが輝きを放つのは、単に異国への憧憬を掻き立てるからではない。それを手にすることで、遠く隔たった誰かとつながることができるからである。

バッチャが紡ぐ物語は終わらない。軽やかに世界を旅しながら、私とあなたを結びつけてくれるはずである。



アーティスト・イン・レジデンスを終えて

高橋彩子
(アッチコッチパッチ主宰)

無事にスタートし終えられたことにほっとしているし、反面、正直今後を迷って
もいる。

当初、ディレクターであるモンデンエミコ氏からの依頼は、アーティストという
仕事についての話をすることであった。初めての依頼ではあったが、経歴や仕事
の進め方、そこに海外での布の買い付けの話をまぶせばいいのであろうと気楽に
考えていた。が、打ち合わせに行ってみると依頼には展示を含んでいた。とな
ると、この仕事の依頼がなぜ私にきたのか、正直わからなかった。

そもそも私は自らをアーティストと名乗ったことはない。“パッチのおばさん”を
自称し、商品と作品の間を漂うモノを作ってきた。仕事の依頼は、あくまで「売り
上げ予算」ありきで、7割販売して予算が達成するようパッチを用意する、そんな
仕事をしてきた。

それよりなにより、私の作っているものは小さい。空間とのバランスが取れない。

しかし、どうやら彼女には迷いがなく、ように見える。まず、彼女は私の作っ
ているものを、商品ではなく作品として見ている。そして「彫刻作品」と感じていると
いう。だとしても、あまりに巨大な空間を目の前に、ここで何ができるのかの想像
すらできなかった。それでも、なぜか仕事を受けていた。滞在中に、布で世界旅
行を体験するような「地図」をつくろう、それだけを決めた。彼女は経験値から、
なにかできる確信があったのだろうか。

私はといえば、あの空間で何ができるのか想像ができない日々が続く。そんな
私の頭にはモンデン氏から発せられた「彫刻」というキーワードが常にあった。そ
して彼女が考案した「ダンボールパッチ」企画の斬新さに、作ることが好きな原点

に戻り、なにかが動き出す感覚があった。ここで求められているのは、予算を積み
上げることで、新しい作品をお披露目することでもない。「彫刻」と企画者に見
えているこのパッチをとりまく世界を解放し、広げることだ。幸い「彫刻」はモンデ
ン氏の専攻分野であり芸術村の得意分野のようだ。ここを作品で埋めることは不
可能だが、彼女となら、パッチの世界を広げることはできそうに思えてきた。

同時にパッチのはじまりとなる世界中の布や装身具という素材の世界観を体験
してもらいたいという思いも募る。「ダンボールパッチ」のワークショップで実際
に素材に触ってもらえれば、素材のなかにある文様や風合いを面白がってもらえ
るのではないかと。「彫刻」と「ダンボールパッチ」というモンデン氏からのヒントで、
私の日々の制作活動と芸術村がどんどん繋がっていく感覚があった。

今回、実際に行った展示の具体的なプランが固まったのは、金沢に行く3週間
ほど前だ。正直その場で行わなければならない作業が多く、出たとこ勝負では
あったし、到底自分ひとりではできるようなものではなかったが、そこは、モンデ
ン氏から聞いていたアート工房サポートスタッフ“アートアンツ”が積極的に関わっ





て、おもしろがってくれるであろうという妙な確信があった。

メインにするのは素材を体感し、空間に動きを出すための「布の森」。天井から大量の布を吊り下げ、大きなバッチを作ろうと考えた。これはアンツに全面的に委ねた。私のプランは布を吊り、塊に見せることであったが、彼らはリズムカルに吊り下げ高さを演出するだけでなく、布を渡して広げ、面で見せる工夫をしてくれた。会場に入るとまず目に入る位置に設置された「布の森」は、この展示のシンボルツリーのようにもなり、同時に妙な違和感を生むことができたとも思う。バッチの解放という課題には「バッチの脳内」と称して制作過程を壁面に書きつけた。布の森と同じ舞台上にある壁に、森で体感した布たちがどのようにバッチになるかを解説。ここは、編集企画という前職での経験が生きたように思う。バッチをテーマにした見開きの雑誌の誌面をつくろうと考えた。

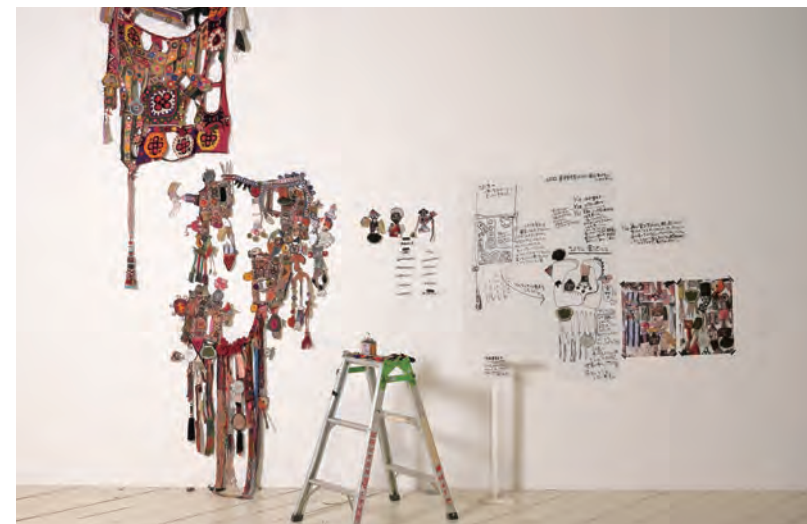
その先のスペースには、モンデン氏の言葉を信じ、「彫刻作品」のようにバッチを展示した。恐怖の広さは、贅沢な空間となり、泳ぐようなバッチを見ることができた。

そして、「ダンボールバッチ」。モンデン氏がアートアンツとともに改良を重ね、先に繋がるコンテンツになったと思う。紙を切り、素材を拾い上げる作業はバッチ作りを追体験してもらえたし、布ではなく紙にすることにより、自由度は上がり、一方造作の難易度は下がり、子どもを含め多くの人に楽しんでもらえる企画となった。できない、から出発するのではなく、どうしたら実現できるかを考え続けたモンデン氏はじめ芸術村のみなさんに頭が下がる。

企画当初に決めた「マップ」制作。思ったように地図が広がっていかず消化不良の気持ちもあるが、途中からは「ダンボールバッチ」も共に縫いこんでいき、この空間・時間でしかできないものとなった。アートアンツが素材となるダンボールの布を用意してくれ、共同作業ができたと思う。みなで作りあげたものとなった。

イメージトレーニングをしては行ったが、やはり再会した空間は以前より巨大に思えた。怯みはしたが、この空間に居られることの幸せが大きくなっていった。バッチの晴れ舞台を用意でき、バッチへの恩返しができたと感じている。一方で冒頭で申し上げた通り、この麻薬のような強烈な経験を通して、後には引けない、という別の恐怖心や迷いも生まれている。依頼の当初、空気を動かす挑戦を求めてはいたが、大きすぎる挑戦でもあった。が、やり終わって、こんな刺激的な経験をまた引き寄せたいという思いがある。懲りない。

最後になるが、今回の機会を与えてくれ、企画を練り、準備をし、可能性を信じて並走してくれたディレクターのお二人に感謝したい。そしてアンツのみなさん、深夜まで諦めずにより空間をよき企画を、と付き合い続けてくれたことに感謝します。みなさんの情熱にささえられました、またいつか芸術村のみなさんと仕事ができるよう精進します。



《布マップ》2022

アーティスト・イン・レジデンス
高橋彩子「布で世界を旅する」
2022年3月19日(土)－27日(日)
金沢市民芸術村 PIT5アート工房

作家滞在制作「布マップ」
3月16日(水)－21日(月・祝)
3月26日(土)－27日(日)

ワークショップ アートアンツ×高橋彩子
「“段ボールパッチ”を作ろう!」
3月19日(土)－21日(月・祝)
3月25日(金)－27日(日)

アーティストトーク「トークで旅する」
3月21日(月・祝)

【同時開催】作品展示・販売
3月19日(土)－29日(火)
会場:Leto(金沢市南町3-34)



高橋彩子xアートアンツ集合写真



2025

Workshop & Fashion show

「芸術村ファッションショー」

2025年2月15日(土)－16日(日)
金沢市民芸術村 PIT5アート工房

高橋彩子さんがふたつのワークショップを開催しました。親子を対象とした「世界の布でおしゃれしてランウェイを歩こう!」では、ダンボールパッチをつかってファッションアイテムを作り、着飾った親子が芸術村ファッションショーを楽しみました。大人を対象とした「世界を旅してアッチコッチパッチを作ろう!」では、世界各地から集めた布やパーツを紡いで、繋げて、世界にひとつ自分だけのパッチを作りました。



ファッションアイテムを作っている様子





芸術村ファッションショーの様子



パッチを作っている様子



完成したパッチ



大人ワークショップ参加者集合写真 (2月15日)

親子ワークショップ

参加者の感想

兄は没頭していました。キラキラした装飾品、見たことない柄に初めはパーツを繋げるだけでしたが、どんどん立体になり、イメージが広がっている様子でした。弟はやる気が全くなかったのですが、“勇者”や“強い”とテーマをつけると、やる気になってランウェイはノリノリでした(笑)。

始めはごきげんなめで困りましたが、スタッフのおかげでランウェイを歩くことができました。

こどもたちが楽しそう
ですてきなファッション
ショーでした！

ママににあう作品がつ
くれてよかったです。

今までで一番楽しかった
です！5歳でも簡単にでき
てよかったです！

あっという間に時間がた
ちました。つくるだけでな
くファッションショーおも
しろいですね。



大人ワークショップ

とても楽しかったです。素材と先生
の自由さに感動しました！貴重な材
料をふんだんにつかせてもらって
ありがとうございました。

普段使わない脳を使っ
て、新鮮でした。作業に没
頭している時間がとても
心地よかったです。

布という素材の自由度
の高さに驚きました。

時間が足りず没頭して作っていました。先生のアド
バイスで布のいろんな表情を使いたくなりました。
また前回の展示の際にも、あえてそのまま使わな
い、という事を伺っていたので、どうやって布の
柄を生かしながら、裏切れるだろうかと思いながら
作りました。

大好きな彩子さんに会
えてとてもhappy。かが
やきに乘ってやってきた
かがありました。

2年前に友人と高橋さんの展示と
ダンボールでパッチを作る体験を
して、今回のワークショップも体験
できて、とても有意義な時間を過
すごすことができました！

大人向けワークショッ
プを増やしてほしいで
す。楽しかったです。





旅の途中

モンデンエミコ

(金沢市民芸術村アート工房ディレクター)

人生を旅に例えるなら、私たちがここで出会い時間を共にしたのも、旅の途中の出来事であり、誰に出会い、どんな経験をしたかで、その後の人生の豊かさも変化していく。高橋彩子氏に出会い、芸術村で展覧会を開催してから3年がたった。コロナ禍だったあの際にご来場下さった方の熱い眼差しが忘れられず、今度はワークショップメインの企画を、一緒に作りたいと思ったのがはじまりであった。

親子対象のワークショップでは、魅力的なダンボールバッヂ (アッチコッチバッヂのプリントをダンボールに貼ったもの) に惹き込まれ、こどもも大人も迷うことなく自分の世界にのめり込み、想像以上のオシャレアイテムを次々と生み出した。勇敢な姿の剣士、お姫さまや果物屋さんなど、少し恥ずかしそうにしながらも、こども達は堂々とランウェイを歩き、大人達はその様子を誇らしげに見つめていた。芸術村ファッションショーは、個性豊かなバッヂファッションアイテムによって、会場中が親子の笑顔で溢れた。

おとな対象のワークショップは、高橋氏が全国各地で開催しているバッヂを作る人気ワークショップである。丁寧に材料や制作場所を整える姿から、参加者との時間を大切にしたいという思いが伝わってきた。参加者は贅沢にも、高橋氏が繋いだ大きな世界の布に裁ち鋏をいれ、お気に入りの部分を切り出し、素材と対峙してバッヂ制作に没頭した。

「何よりたいせつなのは、ほかの人のつくっているものはみないこと」

この言葉に、自分の生き方を貫いてきた高橋氏の魅力、そしてどうしてバッヂに惹かれるのか、その答えがあるように思えた。布を通して世界の誰かと自分の創造が重なり、参加者の手から作り出されたバッヂは堂々としてかっこよかった。

本企画を協働してくださった高橋氏に感謝すると共に、すべてのみなさんの創造の旅が続くことを願って。

ワークショップを終えて

高橋彩子

(アッチコッチバッヂ主宰)

前回の展覧会後に寄せた文章を読み返すたび、あの充足した想いがよみがえる。3年ぶりに金沢市民芸術村アート工房へ。

2022年3月、アーティスト・イン・レジデンスとして『布で世界を旅する』を行なった。この期間に来場者とともに行なった大胆な企画がディレクター、モンデン氏から発案された“ダンボールバッヂ”である。自身の作品の集合体を印刷し、その印刷物をダンボールに貼り、切り貼りして遊ぶアイデア。紙という自由度の高い素材での創作は、特に子どもたちにとっての格好の遊びとなった。このアイデアに私は心底驚いた。私のライフワークは世界中の民族衣装や装身具を使い“アッチコッチバッヂ”と名付けたバッヂを作ることだが、その素材となる布の先に世界中の人々の営みや人柄を想像している。小さな布から作り手の人間性が見えてくるようだし、過酷な環境で過ごす中で美しいものを求める人間の性のようなもの、時には情念や怨念のようなものを想像し、心を掴まれる。ほんの小さな針目にそれらを感じながら制作をしているのだが、その作品をチープな紙に印刷すると、当たり前だがバッヂは平面になり、手触りはフラットになる。手触りや匂いを排することで、素材が持つ、造形の力強さやその個性はより力強く立ち上がってきたのだ。造形自体によりフォーカスできた。それに加えて、なんとも軽やか。この発見は私の制作の姿勢をも変えた。布に執着することなく、しかしいつだって“布”を通して“世界を旅する”手段を手に入れた気持ちだった。布と紙、組み合わせは無限で最強だった。

昨年、モンデン氏が今年度で退任する旨の話を聞いた。そして、最後に「親子のためのワークショップ」と一緒に、という提案をいただいた。「ダンボールバッヂを企画の軸にしよう」。彼女の大発明で、私なりに送り出したかった。前回、子どもたちの多くが身につけられるものを作っていたこと、また、今年度のアート工房のテーマがテキスタイルであることも聞き、工房の大階段をランウェイに見立てて



ファッションショーを行うことを提案。

当日、期待以上に、子どもたちの創作物は豊かであった。豊富に用意された素材を使い、思い思いに手を動かす。そして、ランウェイを歩く”本番”。手を動かし、コミュニケーションが生まれる喜びを体験。彼らに布と紙の境界は存在しない。工房全体を使ったダイナミックなワークショップとなった。

そして大人のためのワークショップ。それぞれが素材と向き合い、黙々と手を動かす時間。子どもの頃にした創作のように自由に行かないもどかしさは大人になれば誰もが一度は感じることだろう。が、参加者の作りたいという初期衝動に突き動かされたエネルギーあふれる作品を拝見するたび、大人になって自由が失われるのでは決してなく、子どものころからひと続きの道の上にあり、確固として人の中に存在し続けていると確信できる。自分自身、鼓舞される思いだ。少し後悔があるとすれば、大人のワークショップでもダンボールパッチもひとつの選択肢として提案すべきだった。手を動かすことの喜び、初期衝動はより軽やかに実現したかもしれない。

最後に。モンデンさんとこのアート工房と関われたことに感謝いたします。モンデンさんの大発見であるダンボールパッチ、いつかまた彼女とこの仕事をしてみたい、作ることを愛する仲間として。



「芸術村ファッションショー」

世界の布でおしゃれしてランウェイを歩こう！

2025年2月16日(日) 10:00-12:00

金沢市民芸術村 PIT5アート工房

講師：高橋彩子

対象：親子(※3歳以上～小学6年生以下)

世界を旅してアッチコッチパッチを作ろう！

2025年2月15日(土)・16日(日) 15:00-17:00

金沢市民芸術村 PIT5アート工房

講師：高橋彩子

対象：おとな(※18歳以上)



親子ワークショップ子ども集合写真



大人ワークショップ参加者集合写真(2月16日)



高橋彩子

1977年、横浜生まれ。小さいころからの憧れの存在は“のっばさん”。2003年、メキシコに渡り、人形劇団を主宰するメキシコ人女性を師事。2010年、世界の布や装飾具を使ったアッチコッチパッチを作りはじめる。2022年、金沢市民芸術村でアーティスト・イン・レジデンス「布で世界を旅する」を開催。2024年、師事したメキシコ人女性と共に日本全国を周り、人形影絵劇『Ema』の公演を行った。

@bacchiworks_saeko

<http://www.saekotakahashi.com>

アーティスト・イン・レジデンス

高橋彩子「布で世界を旅する」

会期：2022年3月19日(土)—3月27日(日)

会場：金沢市民芸術村 PIT5アート工房

来場者数：614名

アーティスト：高橋彩子

企画・担当：モンデンエミコ・宮崎竜成（金沢市民芸術村アート工房ディレクター）

協力：アートアンツ（阿知波まどか、渥美俊太郎、金山麻里、金山洋子、河合和敏、北出まり子、新木修、田井麻子、寺西由佳、野口良一、長谷和明、渡辺碧、渡辺秀亮、渡辺杏）、鈴木由美、井上タツ子、小河原郁代、小山千夏、新宮睦美、藤井千絵、Leto
金沢市民芸術村事務所スタッフ

「芸術村ファッションショー」

会期：2025年2月15日(土)—16日(日)

会場：金沢市民芸術村 PIT5アート工房

参加人数：親子ワークショップ 17家族 54名 / おとなワークショップ 22名

アーティスト：高橋彩子

企画・担当：モンデンエミコ・寺西由佳（金沢市民芸術村アート工房ディレクター）

協力：アートアンツ（渥美俊太郎、今村恵子、金山麻里、金山洋子、河合和敏、菊谷達史、北出まり子、新木修、田井麻子、中道まりこ、野口良一、長谷和明、宮崎竜成、渡辺秀亮、渡辺杏）、金沢市民芸術村事務所スタッフ

主催：金沢市民芸術村アクションプラン実行委員会（公益財団法人金沢創造芸術財団、金沢市）
表紙タイトルデザイン：方野公寛（十月のオクトパス）
記録集編集・デザイン：モンデンエミコ・北口加奈子
写真撮影：池田ひらく、高橋彩子、野口良一、長谷和明、宮崎竜成、モンデンエミコ

発行日：2025年3月31日

発行：金沢市民芸術村 PIT5アート工房（石川県金沢市大和町1-1） TEL 076-265-8300(代表)

本書の全文または一部の無断での転載・複製はご遠慮ください。

